

享楽としてのテロル、独裁、革命

—『ジュリエット物語または悪徳の栄え』にみるサドの革命観—

上田 雅子

はじめに

サドがフランス大革命期にあってロベスピエール失脚後のテルミドールの反動期に『新ジュスティーン』の続編として著した6部構成の小説である『ジュリエット物語または悪徳の栄え』を本論文では題材として取り扱う。具体的には、この作品の第5部に挿入されている小説内の小説として独立した物語となっている「ブリザ＝テスト物語」に主に焦点を当て、リベルタンたちによるスウェーデンの王政転覆の陰謀のエピソードが含まれているこの物語を読み解きながら、作品全体との対比を試みつつ、フランス大革命を経験したサドが革命という出来事を自身の文学を通してどう考えたのかの手がかりをつかむことを目指す。

フランス大革命期は *révolution* という言葉の意味内容が変化した時代でもある。本来この語は18世紀においては天文学的な意味が第1で、天体の元の位置への回帰を表し、政治的な意味では政体の形態の復元を意味していたが¹、フランス大革命の激動の時代のなかで古い秩序への回帰という意味合いではなく、全てを変えてしまうものという意味が定着した²、とされる。これに対してサドの場合は、ミシェル・ドロンによれば、革命という出来事を進歩として捉える考えを拒否し、ナポレオン時代に至ってむしろ古い意味の革命観を有するに至った³、と指摘しており興味深い。

貴族としての出自を有すると同時にアンシャン・レジームのもとで勅令拘引状により投獄され、バスチーユ牢獄襲撃の後に解放されたという経験を持つサドはフランス大革命との関係では明確に矛盾した複雑な背景を持つ作家である。サドは過激で大胆な思想を自身の作品のなかで展開し、大革命当時の反教権主義・反カトリック思想を無神論的

¹ François Furet, Mona Ozouf, et collaborateurs, *Dictionnaire critique de la Révolution française*, Flammarion, 1992, p. 847.

² *Ibid.*, pp. 850-851.

³ Michel Delon, « Sade dans la Révolution », *Revue Française d'Etudes Américaines*, no.40, 1989, pp. 156-157.

立場から徹底し、既成の社会道徳の否定と性の解放を主張した革命的な孤高の作家と見なされやすい面があり、シュールリアリストやテル・ケルグループにその傾向があった。実際、サドの小説や革命期に書いた政治文書のなかに共和主義的な内容のものがあったりするのも事実である。しかし、勅令拘引状で投獄されたサドは絶対王政のもとでの専制を決して支持はしていないが、ジャコバン派の恐怖政治をも嫌悪しており、彼の革命期の書簡や政治文書を見ると、ルイ 16 世を敬愛しているようにも、共和主義者であるようにも、一切の専制を否定しているようにも読めるし、彼本人の迷いも見受けられる。サドをフランス大革命の精神を共有した時代の同伴者として安易に捉えることの誤りがこれまでの先行研究では示されてきている。

例えば、サドの実証的な伝記的研究の仕事で知られるモーリス・ルヴェールは、彼をある種の革命家と捉える向きを否定している。ルヴェールによれば、サドは昔ながらの貴族であり⁴、出獄後には反ジャコバンの立場から英国流の立憲君主制を支持する「不偏不党人のクラブ」に入っており⁵、共和主義者ではなかった、と論じ、さらにサドにとっては革命の理想はキリスト教と同様に信じられるものではなく、彼にとっては文学のみが信じられるものだった⁶、と述べ、さらにサドのテキストのなかに共和主義的な内容のものがあったとしてもそれは彼の政治的な微妙な立ち位置ゆえの状況の産物であり⁷、革命政府に忠誠を示す必要があったため⁸、とする。サドは自身の作品を世に出すときも、おびただしい悪徳を描いた小説については自分の名前を出さずに出版するなどしており、彼の実人生での政治的態度はこれと相似的であると言えよう。

確かにサドの置かれた矛盾する背景を無視して彼のエクリチュールの過激さをただちにフランス大革命の精神と結びつけるのはいささか飛躍していると言わざるを得ないだろう。しかし、その一方では、先述のルヴェール自身も述べているように、サドの本領が文学にある以上は彼の実人生と区別して文学からサドの革命観を探ることが重要であると考えられる。サド自身の曖昧な政治的態度からは見えてこない本音を彼の文学からこそ読み取れるというものであろう。また、彼のテキストの生成を現実のサドの矛盾した状況に還元するのも作者と作品をきちんと区別しない態度であり、安易に思われる。実人生での置かれた立場と作品を区別してサドを読んでいくことも実人生においては曖昧な面の強いサドの革命観を抽出する手がかりとなるのではないのだろうか。サドがフランス大革命とどう対峙したのかは彼の作品を読み解く上でも、またフランス大革命という歴史上の重大な出来事を考える上でも重要である。まず、彼の傑作とされる『美德の不運』、『ジュスティーン』、『新ジュスティーン』のジュスティーン 3 部作

⁴ Maurice Lever, *Donatien Alphonse François, marquis de Sade*, Fayard, 1991, p. 460.

⁵ *Ibid.*, p. 463.

⁶ *Ibid.*, pp. 474-475.

⁷ *Ibid.*, p. 474.

⁸ *Ibid.*, p. 475.

及び『ジュリエット物語または悪徳の栄え』や『閨房哲学』はいずれも革命期に書かれており、現実がどう彼の創作に影響したのかは作品を読み解く上で重要な鍵となる。その一方でサドは自身の書簡や革命期に書いた5つの政治文書で時の体制に言及したりもしているものも、彼の思想が表現される舞台はやはり文学であり、作品の読解を通してこそサドの革命観に迫ることが出来ると言える。

さらに、単にサドの作品が矛盾した内容を同時に含んでいると述べるのだけではやはり読みとしては不十分であり、内在的な一貫性を探る読みも必要なのではないのか。例えば、『ジュリエット物語または悪徳の栄え』では政治思想に関係したものを含むさまざまなテーマでの哲学談義が登場人物によってたびたび反復され、舞台装置や登場人物の行動も政治性を帯びたものがしばしば繰り返されている。一例を挙げると、主人公のジュリエットがイタリアで知り合う人物であるキージが以下のような興味深い法と関連した政治的思考を述べている。

[...]専制へと通じるのは法の乱用だ、圧制者とは法を創る者で、、法に命じさせ、あるいは自己の利害のためにそれを活用する者だ。圧制者から乱用する手段を奪うのだ、そうすればもはや独裁者などいなくなるだろう。残酷さを発揮する上で法で支えられない独裁者などただの一人もいない、人間の諸権利が十分平等に分配され、各々が自らが被ることになる不正に自身で復讐することが出来るようになった所ならどこでも、圧制者などきつと出てこないであろう、なぜなら犠牲にしようと思いついた最初の被害者の時点で打ち倒されるであろうからだ。独裁者たちが生まれるのは決して無秩序状態のなかではない、法のもとに守られて、あるいは法を盾に取って独裁者たちは出てくるのだ。法の支配はだからこそ邪悪であり、無秩序状態の支配に劣るのだ。私が提唱していることの最大の証拠は、どんな政府が存在する所でも、その政体を作り直すことを欲した時に、自ずから無秩序状態になることが必要だということである。古い諸々の法を廃止するためには、諸々の法のない革命的な体制を確立しなければならない。その体制から結局は新しい法が生まれてくる。しかしその第二の状態は必然的に第一の状態ほど純粋なものではない、なぜなら第二の状態は第一の状態から派生したものだからであり、第一の善、「無秩序状態」を第二の善、「国家の政体」に達するために作り出さねばならなかったからである。人間は自然状態のなかでのみ純粋なのである。そこから離れるとすぐ、墮落する。棄て去れ、私はあなた方に言う、人間を法で良くしようという考えを棄て去れ、法によって人間はより狡猾で悪意あるものになってしまう、決してより有徳にはならないのだ⁹。

⁹ Sade, « Histoire de Juliette », *Œuvres III*, Gallimard, « Pléiade », 1998, p. 838.

フランス大革命の文脈に置いてキージの主張を読むと、革命的でありながら反ジャコバンの政治的考えを表明していることが分かる。もちろん、これはサドの描いた登場人物の1人の思想であり、サドの思想と同一とは断定できないが、彼の革命観の興味深さを示唆するものとは言えるだろう。その一方で、この人物はローマの警察の長という地位に就いており、ナポリの街を放火する計画に加わるなどしており、それこそ法の力で悪事を楽しむ人物でもあるという矛盾を有している。この種の矛盾がこの小説の各所に見られ、そこを解くことこそが重要と思われる。

以上を踏まえると、革命期の経験を経て書かれた小説であり、かつサド文学の最も強い特徴と言える既成の道徳・倫理を逆なでするような悪徳の肯定と無神論、そして圧倒的な淫蕩行為の描写の真骨頂であり、かつ「ブリザ＝テストタ物語」のような革命的な出来事に関連したエピソードを含む『ジュリエット物語または悪徳の栄え』に当たることで彼の革命観を見ていくのは有意義と思われる。

本論文では、「ブリザ＝テストタ物語」で描かれるブリザ＝テストタらの専制主義的な権力への欲望、権力とテロルの関係、飽くなき暴力と破壊へと向かう彼の性向をそれぞれ作品全体のなかで繰り返し出てくる思想や他の主要な登場人物との比較を通して順に分析していくこととする。

1

『ジュリエット物語または悪徳の栄え』の第5部で、この小説の主人公であるジュリエットは仲間たちと共にナポリへと向かう道中で盗賊団に連れ去られ、一味の首領であるブリザ＝テストタの完全な砦のような館まで連れて行かれる。そこでジュリエットはパリにいた時の友人であるクレルウィルに再会し、彼女がブリザ＝テストタの妹であり、今は妻となっていることを知る。連れて来られたのが旧友だったと知ったクレルウィルらによってジュリエットたちは歓迎され、互に意気投合しながらブリザ＝テストタはジュリエットらに自らの波乱万丈の物語を聞かせる。彼の語るエピソードは「ブリザ＝テストタ物語」というタイトルが付けられており、小説内小説として作品全体に対して入れ子となっている。ブリザ＝テストタは第5部のみに登場する人物であり、この小説のなかでは脇役の1人に過ぎないものの、独立性の高い物語として作品全体に位置していることは注目に値する。丁寧に読んでいくと「ブリザ＝テストタ物語」という1つの挿話が作品全体のエッセンスを凝縮しているのが見えてくる。

「ブリザ＝テストタ物語」では、まず彼の生い立ちが語られる。父親と近親相姦の関係となり、父の享楽のために自らが利用されていることに気づくなり、父を殺害し、財産を得て、その後好奇心に駆られてフランスを出て海外遍歴をはじめくんだり述べられる。ブリザ＝テストタはオランダを経て、スウェーデンに渡り、そこで国王グスタフ3世の王権を支える宮廷サイドの勢力とこれに反感を持つ元老院議員らの勢力の対立を知る。元老院議員の1人であるステノと彼は知り合い、国王の専制を打倒する野望を彼が

語るのを聞いて共感を示し、ステノが関わる結社の仲間になっていく。サドのこの小説では王侯貴族や高位聖職者が多く登場し、自らの特権的な立場を活用して次々に悪徳を実践していくのが見て取れるが、ブリザ＝テストタの場合はリベルタンでありながら専制政治に反感を表明するのである。だが、彼も彼の属する結社も単に自らが権力を獲得し、自らの享樂と利益を最大限に満たす道具としてのみ、その権力を活用するつもりであることがすぐに明らかになる。オランダで知り合い、共にスウェーデンまで渡ってきた女性であるエンマにブリザ＝テストタが自らの専制への憎しみを語り、共に結社と関係を持つとうと提案すると、彼女は彼自身こそが専制主義的な人間ではないのかと投げかける。すると、ブリザ＝テストタは自らの専制への野望を明らかにする。

俺は彼女に言った、「エンマ、今、俺はお前の洞察力のほどを見せつけてやりたい一心だ、お前に知らせる事を覚えておいてくれ、スウェーデンの元老院が君主に対して強く対抗する準備を整えているのは圧政への恐怖によるのではないのだ、自分たち以外の人間の手で専制がなされているのを見て抱く妬みによるのだ。一度権力が連中の手に落ちたなら、元老院はもはやきっと専制を嫌わなくなり、逆に自らの幸福を完全なものにするために使うこと間違いなしだろう。ステノの申し入れを受け入れることで俺は彼と同じ役割を果たすし、彼と同じく俺も王杖を壊したくはなくて、使いたいのだ。覚えておいてくれ、この結社が他の原理で動かされるのを見たと思ったらすぐ結社を去るということを。だから、もう俺のことを矛盾していると責めるな、エンマ、お前の目にしている人間が専制主義的でありながらでしか圧政と闘わないことをこれ以上責めないでくれ。王座は皆の好むものであり、人が嫌うのは王座ではなく、そこに座る人間なのだ」¹⁰。

専制への欲望を明言するブリザ＝テストタにとっては王政転覆のための革命など単に自らの欲望のためでしかないのだ。では彼が加わった結社は実際はどうだったのか。元老院議員らが参加するこの結社は由来としてはテンプル騎士団の総長であったジャック・ド・モレーがフランス国王の命によって処刑される前に獄中で設立したものとされ、入会に際しては宣誓と生贄の儀式への参加が求められる。非公然の結社と言うと、サドのこの作品では、他に「犯罪友の会」というのがあり、ジュリエットが入会に際して流神行為を求められていて、サドがこの種の秘密結社的な集まりや儀式への興味を抱いていたことをうかがわせる。ブリザ＝テストタが結社に加わるための儀式が行われた後、メンバーの1人であるブラへは彼に結社の諸目的を語る。

この諸目的というのは、スウェーデンの王権、そして世界のすべての王権、そし

¹⁰ *Ibid.*, p. 956.

て特にブルボン家が支配している国の王権を転覆することだ。だが、他国の同志が仕事を果たすだろうから、我々は自国のことのみをやる。一度玉座に就けば、どの圧政も我々のものには及ぶまいし、どの専制君主も我々が人民の眼を覆う目隠しより厚い目隠しを人民に使うことはないだろう。本質的に無知な状態にこそ我々は人民を落としこむし、すぐにおとなしくさせてしまう、ほとぼしる血が流れ出ようし、我らの仲間ですらも我々の残酷さに仕える存在以上のものにはならぬし、そして我々だけに至上権が集中されることになる。すべての自由は抑圧され、出版の自由、信仰の自由、思想の自由すらも、厳しく禁止される。人民を導くときは啓蒙したり、あるいは鉄鎖を破らないようによく気をつけるべきなのだ¹¹。

ブルボン家への言及が出ていることから、読者はフランス大革命という歴史的出来事との関連を想起させられるが、この引用文が示すようにブリザ＝テストも彼の加わった秘密結社も決して人民の解放のために専制と闘うつもりなど毛頭ないのだ。専制政治を否定しながら、一方では自らは専制主義の権力に与りたいという彼らの欲望はジュリエットと共通している。

ジュリエットはイタリアで知り合った国王や教皇の面前で堂々と王権や教権を否定してみせる。ジュリエットは、サルディニアの国王には王ほど役に立たない物はない、と言い¹²、フローレンスではレオポルドに王を殺すことは蠅や蝶を殺すのと変わらないと語り¹³、ナポリではフェルディナンドに王政廃止を主張し¹⁴、ローマ教皇ピウス 6 世の前では歴代の教皇の悪事を列挙し、王権と教権を転覆するための革命の必要を説くのである¹⁵。だが、ジュリエットは一方ではフェルディナンドに専制政治の魅力は分かると語り、より上手く専制政治をやるべきだと提案し¹⁶、自らが否定して見せた王権や教権を握る者とさまざまな淫蕩行為を楽しみ、レオポルドやフェルディナンドに犯罪を犯しても処罰されないお墨付きを得るくらいの関係になっていくのだ。彼女はヴェスヴィオ火山の噴火口を見ながら、ローマ皇帝ネロへの憧れを口に¹⁷、ローマ市内を放火して大火事を起こす陰謀が彼女の知人たちにより計画され、成功するとローマの大火を眺めながら楽しんだネロのように楽しむのである。そもそもジュリエットはパリにいたときもイタリアから戻っても宮廷の権力者たちの寵愛を受けながら贅沢と快楽と悪徳を欲しいままにしている。専制政治を言葉の上で否定しても、それが人民を抑圧から解放するという観点からの政治信条ではなく、単に自らの上に聳え立つ権威を認めないだけ

¹¹ *Ibid.*, p. 960.

¹² *Ibid.*, p. 690.

¹³ *Ibid.*, p. 734.

¹⁴ *Ibid.*, p. 1025.

¹⁵ *Ibid.*, p. 860.

¹⁶ *Ibid.*, pp. 1025-1026.

¹⁷ *Ibid.*, p. 698.

に過ぎず、機会があれば専制主義的な権力を利用しつくそうと考えている点でブリザ＝テストラとジュリエットは共通性を有しているのである。

また、専制を人間の性格から来る必然的なもの、あるいは専制君主は自然がその意図を果たすために送り込んだ者である、という考え方がこの作品にはしばし出てくる。ジュリエットがパリにいた時期に彼女に寵愛を授けた宮廷の権力者であるサン・フォンは人間には専制主義へと向かう性質があり、権力を行使して他人を抑圧するのが人間の望むところなのだと述べ、専制の必然性をほのめかしている¹⁸。また、彼女の友人であるクレルウィルはジュリエットにネロやヘリオガバルスなどの専制君主はその残忍さで多くの血を流したが、そこには享樂があり、かつ創造と破壊から成り立つ自然の目的からすれば彼らは悪ではなく善を成した人物だと説いている¹⁹。ジュリエットがイタリアで出会ったミンスキーもやはり似たような考えの持ち主であり、強者が弱者を踏みつけにする世界のなかで専制君主の所業を模倣することが罪になるだろうか？と語るのである²⁰。以上のようにサドのこの作品では、専制政治が悪ではなく、人間の欲望のなせる業、強者の権利として描かれているのだ。

また、ブリザ＝テストラの言説を見て行くと、彼自身は神など信じていないが、専制政治の道具として宗教を利用することの意義を認めているのが分かる。彼が秘密結社に入る際に宗教について質問されると次のように答える。

圧政の第 1 のばねとして専制君主が自分の王権を支えたいなら常に動かさねばならないものだ。迷信の松明は常に専制主義の曙光であり、暴君が人民をおとなしくさせるのは常に祝福された鉄鎖を用いてなのだ²¹。

『ジュリエット物語または悪徳の栄え』に出てくる悪人たちは大概是神など存在しない、宗教は唾棄すべきものだと言語るが、その一方では宗教の利用価値をしばしば語る。自らは神を信じることもないが自らの欲望のために他人を専制に従わせ、神を信じさせるという発想は作品全体によく出てくる類のものである。例えば、第 2 部と第 3 部に登場する宮廷の権力者であるサン・フォンは既成の宗教は否定する代わりに「悪の至高存在」を信じる特異な登場人物だが、人民を押さえつけておくための道具としての宗教を評価し、異端審問所の存在する国では首尾よく人民の統治が上手くいくこと、王権と宗教が深い関わりにあることを認めるのだ²²。また、イタリアでジュリエットが会うローマ教皇ピウス 6 世にしても自らの権力と富の源泉としてのみカトリック教会を維持し

¹⁸ *Ibid.*, p. 459.

¹⁹ *Ibid.*, pp. 427-428.

²⁰ *Ibid.*, p. 724.

²¹ *Ibid.*, p. 958.

²² *Ibid.*, p. 458.

ているだけで、神など信じていないことを彼女に明かす²³。こうした点を鑑みてみれば、ブリザ＝テストのような考えは決して特異ではないのだ。彼らは自らは王権も教権も神も信じないが、自分の都合の良い形で利用することは厭わない。他人を犠牲にして自分が楽しむことを肯定するサドのリベルタンらしい考え方といえよう。

2

しかし、ブリザ＝テストの専制主義的な権力を取ろうとする欲望は革命の陰謀を企てる秘密結社に入ることによって満たされる訳ではなかった。秘密結社に入った際に彼は外国人であるゆえに権力の分け前にはあずかれないと告げられるのだ。その一方で、時節が到来すれば元老院議員たちの権力を固めるためにスウェーデン中を殺人と略奪で荒らすことが必要であること、その役を担うことを求められると、ブリザ＝テストはこれを快諾し、人民に革命を待望させるために人々の生活を破壊し、不安に陥れるための陰謀に参加することをも了承し、その後仲間と共に街中で殺人や略奪を欲しいままにしている。陰謀の目的をブラへは次のように明らかにしている。

我々はしばしば盗みをしたり、通りで人を殺したり、井戸、川に毒を投げ込んだり、火事を起こしたり、飢饉を引き起こしたり、動物をどんどん死なせたりするが、すべてそういうことは我々が楽しむためというよりも人民にとって今の政府をうんざりするものにさせ、我々の手で準備される革命を熱烈に望ませるためだ²⁴。

秘密結社のメンバーたちは快樂のための放埒な行為を控えることは決してないと語る者たちであるが、陰謀に関しては快樂以上に手段としての価値を彼らは見出している。彼らと結託するブリザ＝テストは大いに街で殺人や略奪を仲間と共に行うのだ。ここで注目したいのは政治的な目的を果たす手段としてのテロルが肯定され、人民の血を流すことが必要だとされていることである。

権力を維持するためには、人民の血を流す必要があると考えているのは、先に言及したサン・フォンもまた同様なのである。彼は人民全体の幸福ではなく、自分やその仲間の幸福のみを考えて権力を使うと言って憚らない人物であり²⁵、人民の血管から黄金が流れ出るのであれば、人民の血を流すと語り²⁶、そして人民を血みどろにしてしまう恐るべき裁判官が権力の維持には要ると説く²⁷。今から権力を確立するか、それとも既存の権力を維持するかの違いはあるが、権力を固める上で人民の流血をもたらすことを不

²³ *Ibid.*, p. 862.

²⁴ *Ibid.*, p. 961.

²⁵ *Ibid.*, p. 367.

²⁶ *Ibid.*, p. 384.

²⁷ *Ibid.*, p. 458.

可欠とする点でも革命の陰謀を企む秘密結社とサン・フォンは同じなのである。サドはサン・フォンのセリフに注釈を付けてこれがアンシャン・レジームの怪物だ、と書いているが²⁸、このこととつなげて考えると、サドがアンシャン・レジームの宮廷の権力者とフランス大革命期の革命家にさほどの相違を見ていなかったと捉えることも出来よう。人口が増大することがやがては革命につながると恐れたサン・フォンはフランス人の3分の2を虐殺することを計画する。彼はこの計画をクレルウィルやジュリエットに語るが、ジュリエットは怖気付いてしまい、サン・フォンの不興を買うことになる。身の安全を確保するためにフランスを去ったジュリエットはこの件を教訓としてますますいかなる悪事をも動じずにやっていけるように成長していくのである。

そして、人民の間に革命を望む気運が出てきたのを見て、ブリザ＝テストは革命について以下のように述べる。

以上がいかにして哀れな人民が欺かれるかの様だ、以上がいかにして哀れな人民が煽る連中の邪悪な行為の口実でもあり、犠牲者でもあるかの様だ、常に弱く、愚かである人民は、ある時は王を欲せさせられたり、またある時は共和国を欲せさせられたりするのだ、扇動家たちによっていずれかの体制で叶うと思わされる繁栄など彼らの利益ないし情念で創り出された幻影にしか過ぎないのだ²⁹。

彼のこの発言からはブリザ＝テストが革命などと言うものは所詮扇動家が狡猾な手段で人民を利用することで起こるものであり、結局は専制政治を敷く体制側の人間と同じだと考えていることが分かる。

ここまで「ブリザ＝テスト物語」の概要を分析してきたが、明白なのは、ブリザ＝テストという人物が典型的なサドの小説で描かれる自己の享樂のためなら他者の犠牲を省みない者であり、かつ自己の欲望を満たす手段として革命を目指す秘密結社に入ったということである。フランス大革命が勃発し、ロベスピエールによるテロルと彼の失脚、バブーフの陰謀を経た時期にサドがこの小説を書いたことを考えると、当然のことながら現実の革命との関連性を想起せざるを得ない。スウェーデンでの革命未遂のエピソードが国王とその専制に不満を持つ元老院の議員であったという、いわば国王と特権的な身分の人間の対立の構図は絶対王政のもとでの特権の縮小に不満を持っていた貴族たちがルイ16世による貴族への課税の動きに反発したことがフランス大革命の発端だったことを思い出させる。また、元老院議員たちが言う革命のためにテロルを要するという考えや彼らの目指す革命を通しての専制はロベスピエールらによるテロルと恐怖政治を想起させるし、結社の秘密結社的要素はバブーフらの革命結社的でもあるとも言え

²⁸ *Ibid.*, p. 384.

²⁹ *Ibid.*, p. 965.

よう。ブリザ＝テストアが入会に際して王の専制を嫌う理由を答えている所で、サドは注釈で以下のような興味を引くことを書いている。

妬み、野心、傲慢さ、支配されることへの絶望、自分自身で他人に圧政を振りたいという欲望※

※もしかしてストックホルムの革命の精神はパリでは乗り越えられてはいないのでは³⁰？

ここでサドは暗にブリザ＝テストアや彼の関わった結社の物語が彼自身の経験したフランス大革命の現実からインスピレーションを得ていることをほのめかす。サドからして見れば、フランス大革命を駆動させたのは単なる権力と支配への欲望であり、流血の惨事を何とも思わない暴力と破壊を求める情念であったこと、革命家たちは人民を抑圧から解き放つ解放者などではなく、野心と悪意に満ちた陰謀家でしかないと映っているように感じられているのだ。もちろん、ロベスピエールやバブーフなどを人民の幸福などはじめから度外視した野心家に過ぎなかったとまで言うのは明らかに言いすぎだろう。だが、現実の革命は粛清、テロル、内乱そして革命防衛のための戦争でおびただしい人間の血が流れ、ロベスピエールとジャコバン派による恐怖政治が行われたのもまた事実である。その過程に参加した人間たちに権力と支配への欲望がなかったなどと果たして言えるのであろうか？暴力と破壊への飽くなき欲望などなかったなどとどうして言えるのであろうか？悲惨な流血の絵図それ自体が享楽を生むものではなかったのか？その意味では、「ブリザ＝テストア物語」は作品のなかの1エピソードに留まらず、サド自身のフランス大革命の経験を踏まえた上での革命の内実に関する考えが示唆されているとも取れるものと言えるのである。

3

だが、ブリザ＝テストアは結局は仲間たちを裏切ることになる。彼は革命が失敗する公算が大きいことを自らが得た情報で知ると、国王グスタフ3世の側に寝返り、国王に直接革命の計画を暴露してしまうのだ。この間の心境を彼は次のように振り返る。

俺が自分の全人生を捧げてようと欲している利己主義と悪辣さの原理に忠実でありながら、一瞬で党派を衣替えして自分を受け入れてくれた党派を無情にも裏切れることを決断したのはその時だった。私が見たところ、元老院側の党の方が弱かった、私を決心させたのは片方の善し悪しではないのだった、力によってのみでの

³⁰ *Ibid.*, p. 957.

ことだったし、私が付きたかったのは、ただ一つ、力のある方だったのだ³¹。

ブリザ＝テストは自己利益のためなら仲間を裏切ることなど平然とやってのける。『ジュリエット物語または悪徳の栄え』という作品の特徴の1つとして、他人の犠牲を自己の享樂のためには構わないとするリベルタンたちが自らそうしたエゴイズムの欲望の犠牲となっていくことがしばしば起きることが挙げられる。クレルウィルやサン・フォン、イタリアでジュリエットのリベルタン仲間となるボルゲエズなどが他のリベルタンの裏切りで殺されている。サドの描く悪人たちは互いの身体を楽しみあい、利害が一致する限りは行動を共にするが、決して仲間との信義を常に重んじるわけではないのである。そのことを考えると、ブリザ＝テストの行動はこの小説に出てくる登場人物にありがちなものなのである。

しかし疑問として浮かんでくるのは、そもそもブリザ＝テストは秘密結社に入会する時に革命が成功しても専制政治を司る権力を分有出来ない、と告げられていたにもかかわらず、なぜすぐに裏切ろうとはしなかったのか？という点である。この点を解く鍵として、彼が仲間を裏切るばかりか、国王側が革命派を容赦なく弾圧することで流血の惨事が引き起こされることを期待し、国王側の素早い処置で惨事に至らぬまま革命が予防されてしまうと、とても残念がった、ということが指摘出来る。その際の心境を彼は以下のように振り返るのだ。

これは俺が期待していたことでは全くなかった、俺の裏切りのおかげで予想された立て続けの血を前もって楽しみながら、俺は朝から自分が差し出したすべての首が飛ぶのを見るために通りを走り回っていた。愚かなグスタフは全員を生かしておいたのだ。俺はその時王国の四隅を血で浸そうとした者たちに忠実でいなかったことを何と激しく後悔したことか³²。

ブリザ＝テストにとっては自己の享樂と利益こそが第1であり、それを満足させるためという観点から専制を倒そうともするし、革命派を裏切りもするが、また一方では人が次々に殺されていく流血の事態そのものにブリザ＝テストは魅了されているのだ。先に彼が革命の陰謀の1つとして殺人や略奪などのテロルに加わったことを述べたが、ブリザ＝テストが外国人であるために革命が成功しても専制主義的な権力の分け前を享受することは出来ない、と言われても、その時点では秘密結社から離れなかったのは、権力を得るのは別に流血の惨事をもたらすテロルに加われる快感が彼を魅了していた、と考えられよう。自らの手で起こされるテロルであろうと、国王の手による弾圧で

³¹ *Ibid.*, p. 965.

³² *Ibid.*, p. 966.

あろうと、血が流されることそのものが彼にとっては享楽なのだ。

さらに、殺人そのものを肯定する思想もまた『ジュリエット物語または悪徳の栄え』のなかでは繰り返し出てくる。例えば、第2部に出てくる死刑執行人のデルクールはジュリエットに対し、殺人は自然の法則の基盤であり、殺人者こそが自然の役に最も立つだろう、と語り、殺人行為が人間に力を与えてくれる、と言うのである³³。また、ローマ教皇ピウス6世も殺人を肯定する。彼もまた、殺人は自然法則の1つであり、自然が殺人を要しているのだ、と説く³⁴。ピウス6世によれば、殺人者とは、自然においては飢饉やペストみたいなものであり、そもそも罰することの出来ない存在であり、人が殺人に対して震え上がるのは、それが社会のなかで禁止された行為だからであるとジュリエットに語るのだ³⁵。そして、サドのこの小説のなかでは至るところに人を殺す行為が描かれ、およそ人間の生命の尊重などと言うヒューマニズム的な価値観とは全く無縁な位置にこの作品があるのは言うまでもないだろう。

そもそもこの作品に出てくる悪人たちは自らの行為を正当化する際に自然秩序を持ち出すことが実に多い。彼らは大抵は無神論者であるが、一方では自然秩序に従うこと、あるいは自然を範とすることが説かれる。ジュリエットに無神論と淫蕩行為を教えたデルベヌ修道院長は自然こそが人を犠牲にすることを構わずに好きなことをするように命じているのだと、とジュリエットに説き³⁶、宇宙はそれ自体が1つの運動体であり、人間は死後は生まれる前の状態に戻って形を変えて生き続けるのだ、と説く³⁷。このようにして人間の生命の価値は相対化されていくのだ。ジュリエットの友人の占い師であるデュランもまた、死への恐怖は子どもの頃から植えつけられたものに過ぎず、死それ自体が快樂をもたらすものである、と論じ、死は悪ではない、とする³⁸。殺人肯定論を説いたピウス6世にしても自然においては破壊とされるものは自然それ自体が必要とするものであり、大いに有益なものだ、と説き³⁹、それが殺人肯定の前提となっているのである。

上述の作品内の殺人や破壊、自然に関する議論を踏まえると、革命に伴うテロルや粛清、内乱などは自然の摂理からすれば大いに有益なものであり、これとは逆に反革命側が革命派を容赦なく弾圧して血が流されるのもまた自然には有益なことと、なる。専制主義的な権力への欲望とは別に流血への欲望を抱いて、革命派のテロルに加わり、また裏切りもしたブリザ＝テスタはこの点から見れば、サドのこの作品のなかで反復される

³³ *Ibid.*, pp. 450-451.

³⁴ *Ibid.*, p. 868.

³⁵ *Ibid.*, pp. 881-882.

³⁶ *Ibid.*, p. 225.

³⁷ *Ibid.*, pp. 222-223.

³⁸ *Ibid.*, p. 1121.

³⁹ *Ibid.*, pp. 875-876.

思想に実に相応しい人物なのである。

したがって以上を踏まえると、ブリザ＝テストという人物には自己の利己主義から離れた政治的な信条などない、と言うことが出来る。その後彼はエンマこそが秘密結社を裏切ったのだと、かつての仲間に嘘を語り、彼らと共にエンマを残酷な方法で殺し、スウェーデンを去った後はロシアへと行き、盗賊となって、クレルウィルと再会する。ジュリエットに自分の物語を語る時点ではイタリアで盗賊団の首領として暮らしているが、その生活の一端を次のように彼は語る。

しかし俺がどんなに豊かになっても、盗賊稼業を止める訳にはいかなかった、あまりにも魅力があるので離れられないのだ、この稼業が自分の気質に合い過ぎていて、他のことが出来ないのだ、盗みと殺人は私の人生で1番に必要なものとなった、自分が日々身を委ねている甘美な快楽を奪われてしまっただけは俺は生きていけない、俺はここで昔大領主が自分の土地でやっていたような名誉ある仕事をやっている、小さな軍隊も雇っているんだ⁴⁰。

このように語りながら、ブリザ＝テストが専制主義への欲望と殺人や略奪を好き放題にやる欲望をイタリアに砦を構えつつ盗賊団の首領として今や実現していることが読者に示されるのである。ブリザ＝テスト同様に各地を移動しながら最終的に栄華を極めていくジュリエットの旅路と重なるものが見受けられる。また、ジュリエットがリベルタンへの道を歩み始めたパンテモン女子修道院やイタリアでジュリエットが出会った人肉食を好むミンスキーの城に見られるようにサドはリベルタンたちが悪徳に思いのままに耽ることの出来るアジールをたびたび登場させるが、その種の場所を拠点に欲望を欲しいままにするブリザ＝テストは栄華を極めた悪徳の実践者としてこの点でもジュリエットと相似なのである。

おわりに

ここまで「ブリザ＝テスト物語」について分析してきたが、分かったこととしては、ブリザ＝テストという登場人物の思想や行動が作品全体のなかでは決して特異なものではない、ということである。無神論者であること、リベルタンであることは言うに及ばず、専制主義的な権力への志向、殺人や略奪などの暴力と破壊への性向、平然と他人を裏切ることなどがそうであり、作品全体を貫いて何度も反復される殺人や破壊の肯定は彼の行動を肯定するものとなっている。秘密結社やアジールの空間もこの作品に1度ならず出てくる舞台装置である。以上を踏まえて、「ブリザ＝テスト物語」と『ジュリ

⁴⁰ *Ibid.*, p. 1002.

『ジュリエット物語または悪徳の栄え』の相似性を考えると何が言えるであろうか？

まず、言えることとして、サドは革命という出来事を人民を抑圧から解放する歴史の進歩としては捉えていない、ということである。人間の権力への欲望と暴力と破壊への性向が剥き出しになるのが革命であり、近代的なヒューマニズムとは最も遠い位置にある出来事なのである。この点でサドは非常に反革命的に見えるかもしれない。だが、サドは同時に革命を駆動させる暴力と破壊、革命後の新たなる独裁に大いに享楽を見出し、かつ自然秩序からして何ら悪でもない、とも描いて見せるのである。史実としてのフランス大革命がおびただしい血を流し、恐怖政治を生んだのは動かない事実である。この現実恐怖した人々は革命に反対した。実人生におけるサドも恐怖を味わった1人であったとも言えるだろう。だが、サドは神への信仰に立ち返ることも古くからの伝統的な秩序を擁護する側にも立たなかった。彼がやったことは、自らもその渦中にいた恐怖を自身の文学のなかで再現してみせ、かつそのおぞましさを肯定したのである。『ジュリエット物語または悪徳の栄え』が読者に提示しているメッセージから見て取れるのは、革命を誰よりも否定的に捉えつつ、しかし誰よりも肯定的に捉えたのがサドだったのではないのか？ということである。